

シンポジウム 2

「炎症性腸疾患のモニタリングと治療戦略」

司会 池内 浩基（兵庫医科大学炎症性腸疾患外科）

堀木 紀行（三重大学医学部附属病院消化器病センター）

炎症性腸疾患 (IBD) のモニタリングは UC と CD ではやや異なる。UC では、内視鏡検査が最も優れた情報をもたらすが、患者数の増加も著しく、カルプロテクチンや LRG が活動性評価のバイオマーカーとして積極的に用いられるようになってきた。CD では多発する小腸病変や狭窄を伴う直腸肛門病変など、(カプセル)内視鏡検査を行うことが困難な症例も多い。これらの症例でも活動性の評価にはバイオマーカーが有効であるが、手術を前提とする場合はやはり造影検査が最も重要となる。個々の病態を正確にモニタリングし、適切な治療法を選択するのが IBD 専門医としての務めである。